愛知用水祈願祭と掘田稲荷神社

はじめに

『愛知用水史』(p. 131) に掲載されている愛知用水「祈願祭の記念撮影（堀田稲荷神社)」の写真は、昭和 23（1948）年 8 月 7 日に堀田稲荷神社（武豊町）で知多農村同志会が開催されたときのものということになっている。愛知用水土地改良区では、『愛知用水土地改良区五十年の歩み』執筆の際、同じ写真のキャプションを「山崎翁を囲んで愛知用水の着工を祈願する同志会員（昭和 23 年 8 月 7 日、武豊堀田稲荷にて)」とした。

ところが愛知用水土地改良区で資料整理をおこなうなかで、掲載されている写真と同じものと思われる写真を見つけることができた【写真①】。しかしその写真の左上部には、山崎延吉筆と思われる「七十七　丑年　我農生」という文字が入っている。七十七とは 77 歳、喜寿の祝ということであろうか。更によく見れば、この写真は 8 月 7 日撮影ということになっているが、どう見ても夏の服装ではない。この写真はいつ、何のための撮られた写真なのだろうか。

浜島辰雄氏寄贈の記念写真

そもそもこの写真はなぜ愛知用水土地改良区にあるのだろう。元愛知用水土地改良区職員・岡田昌治氏によれば、「平成 16 年 9 月 13 日、不老会の服部事務局長から愛知用水概要図の写真を受領したのと同じころ、愛知用水土地改良区の近所に暮らしていらした浜島辰雄先生から声がかかり、車で訪ねていった。このとき『もう歳だから、この写真を改良区に渡しておく』とおっしゃり、この写真を目の前でアルバムから剥がしてくれた」のだという。そのときアルバムの三角のコーナーシールに写真が引っかかり、左下端が破れてしまった。この写真についての説明はなかったという。

写真①　浜島辰雄氏寄贈の記念写真

山崎延吉日記で撮影日が判明

そこで写真に記された「七十七　丑年　我農生」から考えてみることにした。山崎延吉は 1873 年生まれ、数え歳で 77 歳は 1949 年になる。もしこの写真が『愛知用水土地改良区五十年の歩み』の写真キャプションにある昭和 23（1948）年だとしたら、1 年のずれが生じてしまう。1948 年は子年で、「丑年」は 1949 年だった。どうやらこの写真は 1949 年のものではないかと思われる。また、岡田氏は以前より、この写真が祈願祭がおこなわれたという 8 月 7 日撮影であるということに違和感があったという。8 月の服装ではないからだ。

そこで、山崎延吉日記（安城市歴史博物館所蔵）からこの年代に当たる部分を探してみると、1949 年 3 月 7 日に、以下の記録を見つけることができた（改行は／、判読できない字は■で示した）。

大府町の二名に迎えられ／八時半にて熱田より武豊／
に■なる同志会同窓会／催の祝賀会に出つ
集まりしもの卅余名喜／寿を祝ふ愛情を感／謝す
二名に送られ土産に米／を貰つて六時帰宅
久野は同志会を中川町／長は同志会を代表す
熱田駅にて霙降て／午后武豊にて雪を見／る

『愛知用水史』（p. 131）の知多農村同志会の愛知用水「祈願祭の記念撮影」とある写真は、実際には昭和 24（1949）年 3 月 7 日の知多農村同志会による山崎の喜寿祝賀会であったことが明らかとなった。

堀田稲荷神社にて写真の撮影場所を確認

写真撮影の場所を確認するため堀田稲荷神社に行き、同じ場所に立ってみた【写真②】。しかしよく見てみると、正面に見える大灯籠が、昭和 24 年の記念写真には映っていない。昭和 24 年当時には、大灯籠はなかったのだろうか。確認するため、堀田稲荷神社・豊石神社総代長で武豊町文化財保護委員、武豊町観光ガイドボランティア協会会長の石黒幸男氏に手紙を書いて確認することにした。

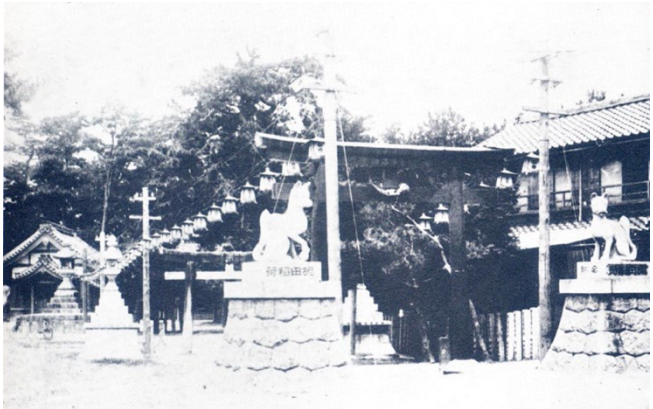
写真②　堀田稲荷神社（2021 年 11 月 4 日撮影）

石黒氏からの返信によれば、堀田稲荷神社で保存されている文書類には、大燈籠についての記録

はないということだった。その理由として「戦後だけでも昭和 28 年の 13 号、昭和 34 年の伊勢湾台風で浸水被害等大きな被害を受け、昭和 59 年に社殿を作り直しました。結果として古い記録などはその際、大半が破棄されたものと思います」とのことだった。また石黒氏が総代になる 10 年前(2010 年頃か)、その就任直前にも古い倉庫にあった写真や文書が雨漏りの被害を受けたことで、前総代長の指示で破棄されたということだった。筆者は手紙で問い合わせたときに、大燈籠の傘の部分に欠けがあることを指摘しておいたのだが、「欠けがあるのは昭和 19 年、20 年と当地で連続した大地震の際に倒壊し、その後修復されたものに違いありませんが記録は有りません」とのことだった。つまり、大燈籠は倒壊した状態の時期があったのである。

記念写真に大燈籠が映っていなかったのは、この地震による倒壊があり、修復される以前だったということが明らかとなった。石黒氏によれば、「昭和 53 年に作成された社殿新築の見積書などには、大灯篭の修復工事は含まれておりませんので、ご指摘の昭和 24 年以降の早い時期に修復されたものと思います。当時の宮司さんをはじめその頃の状況を知る方はほとんどが故人となられ確認する術が有りません」とのことだった。

石黒氏からは大灯籠が映っている、大正期から昭和 10 年代に撮影したと思われる絵葉書の写真も同封されており、大燈籠は当時海に近かった堀田稲荷神社で灯台の役目も果たしていたということである。絵葉書からは当時の様子がわかるだけでなく、大燈籠が掘田稲荷神社のシンボルであったこともわかった【写真③④】。

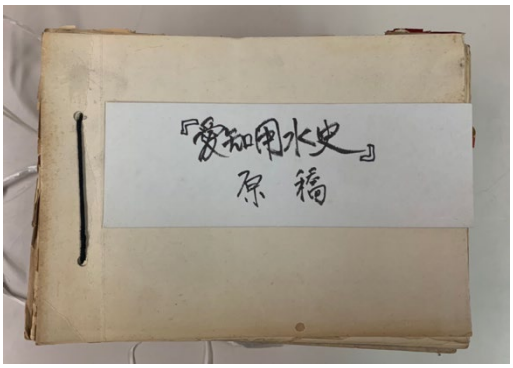


写真③④　大正期から昭和 10 年代に撮影したと思われる掘田稲荷神社の絵葉書

なぜこの写真を祈願祭の写真として使ったか

『愛知用水史』（p. 131）などに掲載されているこの写真は、愛知用水「祈願祭の記念撮影（堀田稲荷神社）」ということになっている。しかも『愛知用水史』は 1968 年刊行で、撮影時から 20 年ほどしか経っていないことを考えると、実際にはこの写真はこのときのものではないということは明らかであったろう。まだ映っている人物が誰かを理解できたはずである。つまり、この写真は撮影時期は異なるものの、実際に祈願祭に集まったメンバーが揃っており、祈願祭の写真がなかったために掲載したものだったのではないだろうか。そのため『愛知用水史』では写真上部の山崎延吉揮毫の文字部分をカットしたのであろう。

愛知用水土地改良区に現在も保存されている『愛知用水史』の原稿を確認したところ、上部のカットを印刷所に指示していることもわかった【写真⑤⑥】。



写真⑤⑥　『愛知用水史』原稿
（愛知用水土地改良区所蔵）
写真にカットの指示がある。

この写真に映っている人物は既に故人となっているが、知多農村同志会の名簿も残されていることから、愛知用水土地改良区ではここに映っている人物を確定していこうと情報を集めている。

（公財）愛知・豊川用水振興協会研究員　　達　志保